

巻頭言

人類は歴史的には感染症との戦いを度々乗り越えてきたが、最近の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は人の往来がグローバルとなった今日、ひとたび感染症が地球上のどこかで発生すれば瞬時に世界中にこの感染が拡散し社会の機能全体が停止しかねないことを世界の誰もが身をもって経験した。2019年12月に中国・武漢で発生した新型コロナウイルス感染症の流行は欧米や中東などの世界各地に広がり2020年3月初旬には世界保健機関（WHO）がパンデミック宣言を発出している。日本も2020年2月のクルーズ船での感染に始まり、その終息もつかの間の3月下旬には国内の感染が拡大し4月初旬には最初の緊急事態宣言が発出されて、以降多くの社会活動が大きく制限を受けてきた。その後も感染の状況はワクチン接種により好転の兆しが見られたが、感染力の強い変異株の出現もあり、いまだ世界の感染収束には程遠い状況にある。ワクチンだけでなく安全で安価な治療薬の開発も急務であり、これらが地球全体に行き渡らなければパンデミックは終息しない。

現在はCOVID-19に高い関心があるが、地球上にはマラリア、HIV、結核などの三大感染症に加え、忘れられがちな顧みられない熱帯病（Neglected Tropical Diseases：NTDs）があり、その対策も忘れてはならない。NTDsはWHOによりアフリカ睡眠病や、リーシュマニア症、シャーガス病、リンパ系フィラリア症、マイセトーマ、住血吸虫症など現在20種が指定されており、アフリカや南米、インド等の低中所得国を中心に世界で10億人にのぼる患者が苦しんでおり、彼らの社会活動にも大きな影響を与えている。NTDsの制圧のため、治療薬の開発は他の感染症と同様に急務であるが、患者が途上国に多いことからその治療薬開発は経済性がないため、製薬企業による通常の医薬品開発は望めず、医薬品開発パートナーシップ（PDP）と産官学のパートナーシップによる開発が必要である。本号ではそのようなNTDsのうち、皮膚リーシュマニア症（CL）に焦点をあてた2020年12月、2021年3月の2つの研究会議の講演や質疑の内容を記録として残したものである。

リーシュマニア症は寄生虫のリーシュマニア原虫により起こり、サシチョウバエにより脊椎動物にその感染が伝播されることによる寄生虫症である。内臓リーシュマニア症（VL）や皮膚リーシュマニア症（CL）、皮膚粘膜リーシュマニア症があるが、研究は主にVLに向けられており、最も患者の多いCLは最も顧みられないNTDsの一つであった。CLは感染部位に皮膚病変や生涯にわたって癒痕を残すなど重度の身体障害をおこし、主にアメリカ大陸、地中海沿岸地域、中東、中央アジアの貧困地域で年間60万人から100万人の新たな患者が生じており、安全で有効、安価な治療薬の開発が待たれている。

2020年12月の会議は世界のCLの研究の現状について治療薬開発のみならず、ワクチンや診断法の開発、疫学研究など研究開発の視点からの討議を目的としたものであり、2021年3月の会議はCLと母子保健、メンタルヘルス、紛争状況での影響や必要とされる治療法やワクチン開発への最新アプローチなど包括的な疾患対策等について、世界の産官学の専門家により討議された貴重な記録である。両会議はDNDi Japanの元日本代表として開設時のDNDiの黎明期の特に我が国への導入のため多大な尽力をした平林史子氏（現DNDi Japan 理事、長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科）による本分野への理解を

深めるための強い熱意と、数少ないCL研究で様々な取り組みを実施してきた長崎大学熱帯医学研究所及び長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科、さらに国境なき医師団の会議開催への絶大なるご支援がなければ実現しなかったものであり、心より関係者及び機関各位に御礼を申し上げたい。

DNDi (Drugs for Neglected Diseases *initiative*) はNTDs等の顧みられない病気の治療薬の開発を目的とするPDPであり、治療薬開発のためリード化合物発見に至る初期の探索研究から前臨床研究、フィールドにおける臨床試験までの一連の創薬研究を産官学のパートナーシップのもと革新的な開発メカニズムにより推進し、さらに医薬品としての登録からアクセスまでを行う非営利のミニバイオテックともいえる国際機関である。DNDiは2003年に設立以来、顧みられない病気に対する9種類の新たな治療薬・治療法を開発しており、特に2018年にはアフリカ睡眠病に対する経口新薬であるフェキシニダゾールの開発に成功し、最近米国FDAからもこの薬が承認されている。また本年(2021年)にはC型肝炎のための入手可能な治療薬としてラピダスピルの開発にも成功している。日本の大学や企業もDNDiとのパートナーシップによるNTDs治療薬開発に多く参画しており、特に我が国の官民ファンドとして設立されたグローバルヘルス技術振興基金(GHITファンド)による強力な支援により多くの臨床研究が可能となっている。感染症は薬剤耐性菌のようなサイレントパンデミックもあり、気候温暖化や人獣共通感染症やベクターなどのファクターも加わり、新興・再興感染症の発生はいつ起きても不思議でなく、今後はこれまで以上に産官学のパートナーシップによる医薬品やワクチン、検査薬等の開発メカニズムを充実させることが必要と思われる。

本会議記録を通じ、日本にはない感染症であるリーシュマニア症に対する認知度を上げ、特にCL研究に携わる研究者や製薬企業のプラットフォームを構築することや、現時点でNTDs治療薬開発に関わっていない大学・研究機関の研究者や企業の方の関心や政策決定に関わる方々のご理解に繋がることを期待したい。NTDs治療薬開発におけるPDPとその役割についても本会議記録を通じさらに理解を深めるとともに、日本発の治療薬を患者の皆さんに送るための一助となれば幸いである。

末尾となるが両会議は長崎大学熱帯医学研究所よりの助成金(申請者:平林史子氏)により実現したものであり、同研究所に深甚な謝意を表したい。

山田 陽城

特定非営利活動法人DNDi Japan 理事長
一般財団法人北里環境科学センター理事長
北里大学名誉教授
東京薬科大学客員教授

北 潔

長崎大学大学院熱帯医学・グローバルヘルス研究科 教授・研究科長
東京大学名誉教授